

流線の視線の先で

女はわたしの足首をつかまえ

あたしもこんなに細かったらと笑った

ぶあつい指　ぬくい指

肉付きの良い下あごやふくらはぎ

正しい答えをしらず

わたしは

惑星大の鉄壁をのんだ

あたたかい襖の中から

めでたく二本足の出で立ち

はじめて月の表面を手にして

ここに0になる

炎が消える

少しざらつき、生白い君の砂丘に旗を立てた

八十余年の時間は降り積もる

箱のふたを閉める音

—